

後発医薬品の使用の有無に影響を及ぼす要因の分析

厚生労働省は、後発医薬品の普及率を上げるべく、2013年4月に「後発医薬品のさらなる使用促進のためのロードマップ」を策定し、「後発医薬品の数量シェアを2018年3月末までに60%以上にすることを掲げています。後発医薬品の普及に向けて、国や地域単位で医療制度の改革や医療政策が進められおり、医療機関単位でも様々な取り組みが行われてきています。

日本において、患者の後発医薬品に対する意識に関する調査報告はわずかにありますが、患者の属性、患者の加入医療保険、使用医薬品の種類などの背景が後発医薬品の実際の使用に影響を及ぼすかどうかの報告はありません。患者の後発医薬品に対する意識だけではなく、後発医薬品の使用に影響を及ぼす要因を把握することは、医療政策の立案や医療機関での取り組みを行う上で非常に重要です。

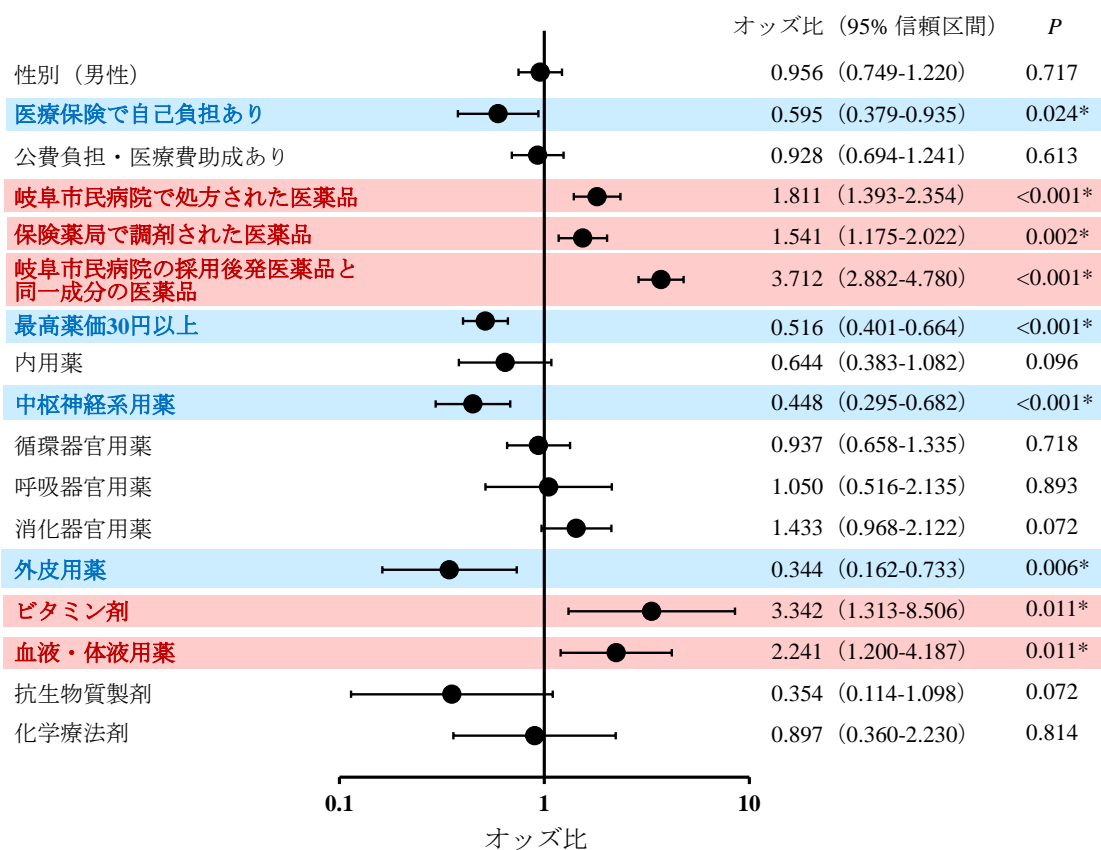
本研究では、日本における後発医薬品の使用に影響を及ぼす要因を明らかにすることを目的とし、遡及的に後発医薬品の使用状況を調査し、多変量解析による分析を行いました。

2014年11月1日から2014年11月14日に岐阜市民病院に入院した患者において、入院時に使用されていた内用および外用医薬品2,191剤を調査対象としました。入院患者について年齢、性別、公的医療保険の種類、公費・医療費助成の有無を調査し、また、入院時に使用していた医薬品について処方機関（岐阜市民病院で処方された医薬品か否か）、調剤機関（保険薬局で調剤された医薬品か否か）、先発医薬品・後発医薬品の分類、薬価、内用・外用の分類および薬効分類を調査しました。後発医薬品か否かを従属変数、単変量解析において $P<0.25$ であった項目を独立変数とし、多重ロジスティック回帰分析を行いました。

多重ロジスティック回帰分析の結果を図1に示します。「医療保険で自己負担あり」、「岐阜市民病院で処方された医薬品」、「保険薬局で調剤された医薬品」、「岐阜市民病院の採用後発医薬品と同一成分の医薬品」、「同一成分かつ同一規格の最高薬価が30円以上の医薬品」、「中枢神経系用薬」、「外皮用薬」、「ビタミン剤」、および「血液・体液用薬」で有意な差がみられました。

医療保険の制度上、医療費の自己負担がない患者に対し、自己負担がある患者では、後発医薬品の使用は有意に低くなりました。岐阜市民病院以外の処方よりも岐阜市民病院の処方のほうが後発医薬品の使用は有意に高く、病院・診療所よりも保険薬局で調剤された医薬品のほうが後発医薬品の使用は有意に高くなりました。岐阜市民病院の採用後発医薬品と同一成分以外の医薬品よりも同一成分の医薬品のほうが後発医薬品の使用は有意に高くなりました。対象医薬品における同一成分かつ同一規格の最高薬価の中央値（30円）で層別化し、評価を行いました。同一成分かつ同一規格の最高薬価が30円未満の医薬品よりも30円以上の医薬品のほうが後発医薬品の使用は有意に高くなりました。

図1 多重ロジスティック回帰分析の結果



本研究では、日本における後発医薬品の使用に影響を及ぼす要因を明らかにしました。特に、日本のある特定の地域において、後発医薬品を採用し積極的な後発医薬品の使用を推進している病院と地域の薬局における日本の医療制度に特徴的な要因を明らかにした意義は大きいと考えます。

【発表論文】

Tomoya Tachi, Kosuke Saito, Hiroki Esaki, Yuta Kanematsu, Aki Yoshida, Ikuto Sugita, Yoshihiro Noguchi, Teppei Makino, Michi Umeda, Masahiro Yasuda, Takashi Mizui, Chitoshi Goto, Hitomi Teramachi, Medical and economic factors influencing generic drug use in the Japanese public health system: Influencing factors in different populations, *Int. J. Health Plann. Manage.*, 33, 489-201, 2018.